

読者会にご参加のみなさまへ。

はじめまして。『三秒間の死角』の翻訳を担当しました、ヘレンハルメ美穂と申します。スウェーデンに住んでいる私は、ふだん日本の読者の方々に接することがほとんどないので、このような機会はとても嬉しいものです。お話ししたいこと、お聞きしたいことがたくさんあります。ほんとうはカーテンの陰にでも隠れて見守っていたい、いや、一読者として参加したい気分です。

この本についても語りだしたら止まりませんが、なるべく早く済ませたいと思います……努力します……

まずは、著者の紹介を少々。

アンデシュ・ルースルドとベリエ・ヘルストレムは、解説にもあるとおり、ジャーナリストと元服役囚という組み合わせのコンビ作家です。ヘルストレムが発起人となった犯罪防止団体に関するドキュメンタリー番組の撮影で知り合って意気投合し、刑務所のありかたについて、刑罰のありかたについて議論を重ねるうちに、自分たちの問題意識を小説という形で社会にぶつけてみようと考えて発表したのが、デビュー作の『制裁』でした。以来、エーヴェルト・グレンス警部が登場するこのシリーズは、本国ではいまのところ6作、日本では3作目までと5作目の本書が発表されているわけですが、どの作品でもかならずなんらかの問題が提起されています。

いまのスウェーデンのミステリー作家の中でも、ジャーナリスティックな社会派といえ、このふたりが筆頭に挙がるのではないかと思います。ふたりが提起する問題は、スウェーデン国内でもあまり知られていない、社会の闇の部分に関することばかりです。彼らの小説を読むと、スウェーデンはなんて怖い国なんだ、幸せな高福祉国家ではなかったのか、と思われるかもしれません。が、問題のない国なんてこの世にひとつもないでしょう。スウェーデン（にかぎらず北欧）の場合、むしろ社会が安定していて、言論の自由が保障されているからこそ、それでも存在する問題にあえて目を向け、容赦なく批判しようとするのではないか、という気がします。根本には公共社会に対する信頼感、「批判をすれば改善される」という性善説があると思います。実際、ルースルド&ヘルストレムのメッセージが政治の場にも届いているのかもしれない、と感じた一件がありました。昨年末、スウェーデンのラインフェルト首相が演説の際に、「スウェーデン社会の闇を描いていると勧められて読んだのですが」と言って、ルースルド&ヘルストレムの本、既刊6冊をごっそり携えて登場したのです。『ボックス21』に描かれている人身売買と強制売春の問題とその対策が、演説のテーマのひとつでした。

ミステリーを通じて社会問題を語るなんて野暮だ、という考えかたもあるかもしれませんが、このふたりの場合は、出発点からして“社会派”としてのスタンスがはっきりしていますから、作品を語るうえでのひとつの視点として、この社会性という側面は重要だろうという気がします。そんなわけで、この面を中心に紹介しましたが、だからといってほかの視点を否定するものではありません。当たり前のことですが、作品をどう読むかはまったくの自由で、だからこそ面白いのだと思います。みなさんがどんな視点から彼らの作品を楽しんでいるか、ぜひお聞きしてみたいです。

個人的には、社会問題に対するジャーナリスティックな目のつけどころの良さ、徹底したリサーチ、問題をくっきりと浮き彫りにする物語の作りかたが、彼らの大きな魅力かな、と思っています。ほかにも当然ありますが、語りだすと止まりそうにないので、あとは読者のみなさまのあいだで、ぜひ語り合っていたいただきたいと思います！

『三秒間の死角』は前述のとおり、このシリーズの5作目に当たり、4作目の『Flickan under gatan（通りの下の少女）』が未訳です。この作品は、ルーマニアから突然バスがやってきて何十人もの子どもがストックホルムに捨てられた事件と、病院の地下通路で女性の遺体が見つかった事件の捜査を軸にしています（いずれも『三秒間の死角』でちらりと言及されています）。さらに『三秒間の死角』に続く6作目『Två soldater（ふたりの戦士）』

も未訳ですが、これは若者のギャングの問題を扱っています。幼いころから仲間に影響され、仲間への絶対の忠誠を誓って犯罪に手を染める子どもたちと、彼らが巻き込まれていく悪循環を描いた小説です。

『三秒間の死角』は、あくまでも一読者としての私の印象ですが、このシリーズの中では社会派の要素が比較的薄く、エンターテインメントの要素が濃いほうなのではないかと思えます。それでも、糾弾している問題はとても根深いものです。末尾の「著者より」に、ふたりの思いがこめられているので、ぜひ飛ばさずに読んでみてください。

ひとつ、読者のみなさんにお聞きしたいことがあります（ほんとうはもっと、言い出したらきりがなくらい、たくさんあるのですが.....）。

『三秒間の死角』を最後まで読んでみて、記憶に残ったフレーズ、読み終わっても覚えているセリフなどはありますか？ フレーズでなくても、印象に残っている場面でもかまいません。ルースルド&ヘルストレムの文章は、表現が淡々としているようでありながら劇的で、緊張感や絶望感を描くのがほんとうに上手だと翻訳していても思います（それがきちんと伝わっていることを願うばかりです）。緊迫感のある印象的な描写やフレーズが多いので、翻訳でもやはり印象に残るようにしたいと思って頭を悩ませます。どんな箇所がどんなふうに伝わっているか、ぜひうかがってみたいです。

長々と書き連ねてしまいました。最後までお読みいただきありがとうございます。では、Ha det så kul（楽しんで）！（読みかたは「はー・で・そ・きゅーる」です。きゅーにアクセントを置くとそれらしくなりますよ。スウェーデン語プチ講座でした。）

ヘレンハルメ美穂